

平成 26 年度研究チーム活動中間報告（第 1 回目）

『論文執筆や学会発表のためのリメディアル英語：「読む・書く・聞く・話す」』

No. 128 研究幹事 渡邊 順司（理工学部）

【はじめに】

本研究では、理系学部の大学生および自然科学系の大学院生が効果的に技術英語を修得する方法について研究することを目的としている。

日本の大学生は、世界的に見て英語を活用する能力が低いといわれている。中学校から高等学校、大学初年次まで、およそ 8 年間にわたって習っているにもかかわらず、アジア地域に限定しても低いと考えられている。例えば、日本語と文法が類似している韓国語を母国語としている韓国を訪問すると、日常会話が英語のできる大学生に普通に出くわす。さらに片言の日本語まで披露してくれて、なかなか流暢である。同じような母国語中心の国家でありながら、これほど英語を使う力に差がつく理由は何であるのか？

理科系を専攻する大学生の多くは、1 年次に共通教育として英語を履修するものの、2 年次や 3 年次に進級するに従い、英語に触れる機会が激減する。わが国の理系専門科目は、英語の専門書の翻訳版が販売されるために、英語で書かれた原書に触れることなく専門科目を学ぶ。卒業研究をスタートする 4 年次になってはじめて英語の文献を読むことになるが、発音や文法の多くを忘れており、なかなか論文が読めない。このような状況を鑑みると、リメディアル教育として英語を再修得する仕組みを考えなければならない。

英語の輪読会で実際に英文を読ませると、かなりの学生がすらすら読めなくなっている。専門用語と格闘しながら、まるで暗号を解読するような状況である。発音できないために単語が記号や暗号に見えてしまい、単なる記号であるために文の区切りやまとまりが把握できなくなっている。日本語に要約するどころではなくなっている。そこで本研究では、「読む・書く・聞く・話す」これら 4 つの能力を個別に学修するのではなく、並行して同時に学修することで効果的に力をつけることができると考えた。単語がきちんと発音できるようになると、単語自体が意味をなして見えてくるため、文章を読み解くことができる。きちんと発音できれば、ゆっくりと話すことも聞き取ることも自然にできるようになるはずである。このようなリメディアル英語に関する方法論に関する検討は、理科系の学生はもとより、文科系の学生についても英語の能力を飛躍的に高めることができると期待される。

【平成 26 年度の研究成果】

幼児期からの言語の修得プロセスは、「聞く→話す→読む→書く」となっている。はじめのうちは、「聞く」ばかりであり、そのうち喃語を発声し、動物の名前や乗り物、食べ物などの単語が聞けて「話す」ようになる。その後、自分の意志と相手の言っていることが十分に理解できるようになり、文字を「読む」と「書く」ことができる。しかしながら学校教育では、これと全く逆のプロセスで言語教育が行われている。技術英語が読めて、書けるようになるためには、「聞く」「話す」プロセスを含めなければならない。自ら声に出して発話すれば、「聞く」と「話す」ことが同時に達成でき、「読む」とつながると考えられる。そこで研究幹事である渡邊の担当する大学院講義の中で、英語の音読と和訳を取り入れ、半期の講義による習熟度の調査を行った。15名の受講学生の半数において、読み込む能力の増大が認められ、効果が示唆された。

【平成27年度の研究にむけて】

「聞く」と「話す」ことの実践が、「読む」と「書く」ことに効果的につながることをさらに検証すべく学部生を含めた研究を推進し、リメディアル英語について総括して叢書として報告する。